

地域リーダーシップ構造の変容過程と住民の意識構造

—三重県阿山郡阿山町 S 区を事例として—

奈良女子大学大学院 藤井和佐

近年地域リーダーシップ構造にかかる要素として注目されているのが、住民の意識構造である。地域リーダーシップ構造にかかる意識構造次元における具体的問題として、とくに「声価がその人物の属性の何に由来するか」（追田耕作・高橋和宏、1987）という声価の源泉の問題があげられる。

声価の源泉の問題は、今まで政治家の社会的背景という形で論じられてきている。つまり、地域リーダーにたいする価値観には帰属主義的価値観と業績主義的価値観とがあり、一般的には、戦後に前者から後者への価値観の移行が指摘されるのである。しかし重要な点は、戦後のリーダーシップが業績主義的リーダーシップに大きく傾いているかというと必ずしもそうではないというところにある。地域への貢献という個人の業績にたいして、地域住民が、新しく家格という帰属主義的価値を付与するという現象がみられるのである。この現象を声価の源泉という角度からとらえるならば、家格を信用した支持と、個人の能力を信用した支持との二つが交差していると考えられる。

本報告では、山間農村である三重県阿山郡阿山町 S 区を事例に上述の現象を具体的に検討する。

この地域のトップ・リーダーは区長である。区長には、庄屋→戸長→村長→区長へと変遷してきたことにもとづく住民の権威的な価値観が投影されている。それは住民の意識における一種の家格の付与である。

現在のリーダーシップ構造にかかるこのような意識構造は、この地域における旧藤堂藩による「無足人」制度（森岡清美、1954a・b）に対応した家格意識にまでさかのぼることができる。無足人には家格（侍筋家系）・財ともにそろった旧無足人ととともに、幕末期に藩への献金の褒賞として与えられた地位としての新無足人がある。経済力のある農民が家格を欲したわけである。無足人から地域役職者が選ばれる傾向が明治期以後しばらく続くことにより、地域役職就任と家格との関係は、住民の意識の上でその後も残存することになる。

S 区では区長経験者しか町議会議員に立候補できないという規範がある。そのような閉鎖的なリクルートメント・ルートを今日でも存続させているのは何故だろうか。それは、住民の意識構造次元において帰属主義的価値観と業績主義的価値観との両者が、地域社会のリーダーシップ構造に深くかかわっているためである。そして、家格と能力とともに必要であるということ以上に、個人の能力を認める場合に帰属主義的価値による住民の評価が根強いのである。業績にたいして帰属主義的評価が与えられることによってリーダーシップは安定性を保っているわけである。個人の能力だけでは町議会議員にはなれない。区長を経験し、地域に貢献することにより「家の柄をあげる」ことが必要なのである。

※引用・参考文献一覧は、大会当日会場にて配布いたします。